

<p>団体名</p> <p>●望ましい社会状況(ビジョン)</p> <p>●団体の社会的役割(ミッション)</p> <p>●団体の活動基盤</p>	<p>NPO法人f.saloon</p> <p>活動タイトル</p> <p>福祉的なケアが必要な青少年のための就労支援ネットワーク設立事業</p> <p>望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）</p> <p>自分ひとりの力ではなかなか社会に参画できず、就労に福祉的なケアが必要な青少年が、そういった目線で就労の機会を与えてくれる企業にアクセスすることができ、そこで社会的に自立していく練習をしながら働くことができる。また、そうしたケアが必要な青少年を抱える施設や団体が、支援してくれる企業や専門家と密に連携をとりながら、ひとりひとりにあった就労の場を提供することのできるネットワークが存在している。</p> <p>当団体のミッションは、上記のようなビジョンの地域・社会を目指すために、支援者と被支援者を結ぶハブとなり、最初の仕組みを作ることである。具体的には、以下の取り組みを推進する。</p> <p>1) 協力してくれる企業を探す（青少年の受け入れ、活動資金の援助）</p> <p>●人的資源：活動に協力してくれる専門家とのつながりを確保し、必要な時にアドバイスや支援を行うことができるようにする。</p> <p>●物的資源：活動に協力してくれる企業をできる限り多く集める。</p> <p>●活動資金：活動資金を援助（寄付）してくれる企業を探し出し、安定した活動基盤を整備する。（協賛金・ハローワーク）</p> <p>●ナレッジ：就労機会を提供してくれる企業の情報をまとめて、個人個人に適した選択ができるように整備する。</p>	<p>■活動風景</p> <p>企業を集めたミーティングの様子</p> 
<p>■活動報告</p> <p>1年間かけて、さまざまな専門家、企業、既存施設とのつながりを作ることができ、発達領域・就労支援領域に関する団体内の理解や関係性の強化につながった。その中で、1年間の集大成として7月15日に備前市立片上高校にて、「みらいのしごとフェスタ2022」を実施した。これまで、協力依頼をしてきた専門家・既存施設・企業などに一参加していただき、当該領域に関するネットワークの強化と、実際に青少年に地元の企業の人たちと触れ合いながら就労体験をする試みである。</p> <p>事前準備では、高校生にチラシのデザインや印刷において実際の企業とやり取りしながらキャリアのイメージを持ってもらう工夫をした。さらにここでマッチングした片上高校の青少年と企業側でインターンの受け入れまでつなげることのできるように片上高校と調整した。本事業をもって、困難を抱える子どもたちの就労支援の地域的なネットワークのある程度の醸成を感じ取ることができた。</p>	<p>■1年間の目標に対する達成状況(まとめ)</p> <p>○専門家・企業・既存施設・行政サービスへの事業の周知と協力の依頼</p> <p>つながった専門家：11、企業：14、既存施設：8</p> <p>○関係する各主体を集めたミーティング</p> <p>参加企業数：9</p> <p>アンケート結果：発達特性に関して全体の64.2%が、受け入れ可能性について全体の30.7%が理解を示した</p> <p>○子どもたちの就労支援</p> <p>就労イベント参加者数：5</p> <p>アンケート結果：全項目の58.3%で肯定的な変化が見られた</p> <p>○（活動基盤強化）専門家とのつながりを増やす</p> <p>つながった専門家の数：11</p> <p>アンケート結果：すべての項目において理解がすすみ、業務の質が改善した</p>	<p>就労体験イベントの様子</p> 
<p>■事業を通じて得られたノウハウ</p> <p>さまざま繋がりや知見を得たことから、困りごとをもっている子どもたちにであった時に具体的にどこに連れていき、なにを情報提供すればよいかかなりの透明度でわかるようになった。また、行政との連携を進める中で、グレーゾーンおよび困難を抱える子どもたちへの就労支援を含めた包括的支援の必要性を共通認識としてもつことができ、行政事業として困難を抱える子どもたちを受け入れる必要性を理解してもらうことができた。我々の団体が運営する小学生向けの放課後児童クラブや、中高生の居場所（ユースセンター）がすでに存在していることから、そこの連携を取りやすい支援が必要な子のための居場所事業を協働ですすめるところまで話が進んだ。</p>	<p>■望ましい社会状況を達成するための課題</p> <p>今回、困難を抱えた子どもたちと出会うこと、信頼関係を築くことが、最初のハードルであり、最大の関門であると感じた。ここでいう困難を抱えた子どもたちとは、いわゆるグレーゾーンと呼ばれる子たちで、福祉の対象にならないまでも、発達特性や何らかの理由で通常の生活力やコミュニケーション能力になんらかの困難を抱えている子たちである。そのような困難を抱えた子どもたちだけを集めようと思ってもうまくいかないため、まずは困難を抱える抱えないに関わらず、いろいろな子どもたちと出会い関係性を築ける居場所が必要である点を、今回の事業を通じて痛感した。そのため、現在実施している中高生の居場所を、改めて全ての子どもたちが気軽に来れて、受け止められるユニバーサルアプローチを基準とした場所へと深化させたい。そして、その場所を通して個人個人の段階に応じた支援や伴走ができる仕組みを通じて、今後は就労支援を実施していきたい。</p>	<p>■活動成果のアピールポイント（自由記入）</p> <p>この1年間の活動を通じて 民間企業・行政・専門家の就労支援ネットワークづくり を達成しました。</p> <p>■受益者の具体的な変化（自由記入）</p> <p>ネットワークが構築されたことによって、企業側と既存施設と行政がつながることができ、結果的に子どもたちや保護者が頼れる先が増えた</p>